無重力高校生。

メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無重力高校生。

【Nコード】

N7271W

【作者名】

メイ

【あらすじ】

女は嫌いだ。あの匂いが、目が、声が、仕草が、笑い方が、全て嫌いだ。女っていう生き物が、わたしには理解できない。話し掛けるな。わたしを見るな。

自分が女でありながら女嫌いである私、瀬村礼は高校入学を果たし、現在この教室に居る。女嫌いを公言した私の周りには、誰も近寄って来なかった。だけど彼女はそんな私に笑いかけ、手を引っ張る。彼女はあまりにも眩し過ぎた。だって私はあんな風には笑えないから。

毒舌パーカーフェイス

面倒だと、心の底から思った。

今日が高校の入学式だった。

制服が可愛いという理由で入った女子が沢山いるであろうこの霜村高校。

こういうものに年頃の乙女は食いつくだろう。一応年頃の乙女である私は特にそういう理由で入った訳でもない。家から距離が最短だっただけだ。だけど考え直すと入らなければ良かった、と思う。私は自分が女でありながら、女が嫌いだった。大嫌いだ。だから女子校ではないが女子の比率が多いこの学校は女嫌いの私にとってはもはや地獄であった。確か全校生徒約500人、男子約200人、女子約300人。しかし入ってしまったものは仕方なく、私は泣きたいような気持ちになりつつ憂鬱な、入学2日目を迎えようとしていた。

入学式の翌日だから、恐らく面倒な事が沢山あるだろう。

朝6時に起きた私は、寝巻きのまま味噌汁と卵焼きと御飯をもそもそとつついて、その後には弁当を作った。中学校までは給食があったからよかったものの、高校は違った。食堂はあるらしいけど、それじゃ金がなくなる。でもまあ学食も興味はあるんで、気が向いたら行ってみよう。

中学校とは違うセーラー服に袖を通す。襟の部分が紺色のギンガムチェックになってるこの制服は、何故かスカーフの色は自由である。入学説明会で販売してたけど、実に何種類もあって煩わしかった。ピンクだの黄色だの緑だの赤だの。私は青にしたけど。

テレビを付けると、12星座の占いが流れていた。牡牛座が

1位。今日の運勢は総合的に絶好調でいい事があるかも、ラックアイテムはヘアアクセサリー、色が白であればグッドでピンクなら恋愛運が何たらかんたら。

ざけんな、占いなんて当たりやしない。私の腰まで伸びた真っ直ぐな黒髪は、何年も前から放置状態で伸ばし放題である。長さも揃ってない所があるし、段が入っていたところも何だかびっこになっている。前髪だけはちゃんと切っているが。そんな髪に今更アクセサリーだとか煩わしい。

特に見る必要もなく私はテレビをぶつんと消した。この場所から音が失われる。静まり返った自宅の中は、いつも通りでもう慣れた。独り暮らしって大体こんなもんだろう。

私の母親も父親も仕事だから何処だか、何たら地方の方にいる。中学生の頃からだからもう慣れた。自由だし、特に母親が居ないのは嬉しい。家事だつて得意だし。ここはマンションだから家賃もかかるけど、月1回10万の仕送りがある。結構厳しいけど、それなりにやりくりしてる。

扉を開けて、私は最寄りのバス停まで歩き始めた。
やなこつたが、今日からマジで高校生活が始まってしまふ訳だ。

……始まんなくてもいいんだけど

「あつ、レイー！ おはよっ！」
どうやったら朝からこんな高い声出せるんだろつな。

バス停までの道のりを歩いていたら途中、前方からやってきた奴がいた。

同じセーラー服に淡いピンクのスカーフ。全体的に癖のある少し茶色の髪は、横で1本に束ねられている。明るい笑顔でこつちに手を振って来る。

中学校からの親友である、相原梨華だった。はてさて、何故家の方向が違うこいつが私とほぼ同じ道を歩いているのか。私は取り敢えず彼女に近づく。

「梨華、あんた引越してないよな？」

「ん？ 引越してないよ？」

「じゃどうしてこんなとこ歩いてんの、まさかとうとう平和ボケ？ 独特の冷静な低い声で私が言うと、梨華の甘くて高い女の子っぽい声がそれを掻き消した。

「ちーがうってばあ！ あたし昨日まで従姉妹の家に泊ってたから。そこから登校してただけー」

「登校初日から何してんのあんた」

まともにつき合って来た友人と言えば、指折り数える位しか居ない。だけど梨華はその中でも1番大事な親友だった。クラスは勿論離れたから、殆ど話す事は無くなってしまっただろうが、同じ高校に行けただけでもまだ幸いだ。

そのままバスに乗り、”霜村高校前”で降りる。2組である私と6組である梨華は勿論下駄箱から別れ、私は1人知らない教室へと向かった。私の席は運がいい事に、窓際で1番後ろであった。この高校は丘の上にあり、窓からの景色がいい。ましてや1年生は教室が4階なのだから、私は心の中でガッツポーズをした。鬱になりそうな高校生活も、ここだけは気に入った。

オーソドックスすぎる自己紹介やら何やらが終わり。

休み時間はある程度のグループができていた。ざわつく教室の中。まあ当然と言えるかもしれないが私は独りで携帯をいじっていた。

「ねー、瀬村さんだよな？ どこ中学出身なの??」

「は??」

顔をあげると、いつの間にか座っている私の机の前に女子2、3

人が立っていた。その中心に居る女子がどこの中学校なのかだとかいう意味不明な質問をしてくる。

「すっごい黒い綺麗な髪の毛、めっちゃ長かったから覚えてたのー」
そう甘ったるい声をした女子が言う。

これでもかかって位短いスカートに、ほぼ白目が見えない不自然に長い睫毛の瞳。無駄に凝ってる派手な頭した奴らだ。こいつの頭のとっぺんにくつついてる妙なポリウレームの団子みたいな固まりは、一体何に役立つんだらう。つかどーやってつくってんの？

「どうでもいいけど」

女子を一瞥して、席を立つ。

「どいて」

教室を出て、早歩きで逃げる。

あの匂いが、目が、声が、仕草が、笑い方が、全て嫌いだ。

女っていう生き物が、わたしには理解できない。

話し掛けるな。わたしを見るな。

屋上に飛び込む。

「っはあ、はあっ……!!」

扉を背中越しに閉めて、座り込む。
力を失くして蹲る。

女は嫌いだ。

微かに吹いた風が、わたしの長い髪を揺らした。

視界の半分以上を覆った黒髪は、わたしの思考をも覆うようだった。

正反対の幼馴染

あの後吐き気を催して、屋上から4階の女子便所に駆け込みそのまま吐いた。

女嫌い？ 女性不信？ 女性恐怖症？ …… 何だかは分らんが。拒否反応、条件反射。

「げほつ、うえ、かはつ……はあ、はつ、」

幼い頃から身体は丈夫ではない。吐くものを全て吐き出すと、水道で水を飲み干して廊下に直接座った。壁を背もたれにするように4階は教室より特別教室しかないようで、誰も居ない。ましてや新人生だったら尚更な。

あー、うん。吐くとかかなり体力消耗すんだよな。疲れた。

腕時計を見ると、あと10分で4時間目にあたる授業が始まるどころだった。ならあと10分はこうしていようか。息切れを整えようと深呼吸をする。ハンカチで口の周りについた水を拭う。

……いつまでもいこうしてる訳にもいかねえか。

立ち上がるとふらつとよろけたけど、体勢を持ち直して教室へ向かった。

次の時間は校則・学校設備とかの説明だった。至極どうでもいい半分寝そうになりながらなんとか1時間耐えらるともう昼。クラスメイト達は大体グループができてからその派閥ごと、机をくっつけて弁当らしい。流石に初日から食堂使う奴はいねえんだな。私も弁当だし。

「ねえ瀬村さん、あたし達と一緒に弁当食べようよ」

甘ったるい声に顔を上げる。多分この時私の顔は最高にしかめっ面だっただろう。

「はあ？」

声を掛けてきたそいつは、さっきの妙なポリウームの団子みたい

な固まりを頭のとっぺんにくっつけた奴だった。こいつ、懲りねえのかよ…

「嫌だ。ほっとけ」

「えーでもいいじゃん。どうせ1人で食べるんでしょ？」
カチンときた。

「ああ？ じゃあ何だ、1人で飯食う寂しい奴への同情つてやつか？ んなのいらねえよ。ほっとけつたのが聞こえねえのかよ」

私が男子並みの低い声で暴言を吐く。クラス全員が私を見ていた時だ。

「あ、レイイっ！ お昼一緒に食べよ？」

びびった。

その明るい声に振り向くと、1年2組の教室の後方の入口に、弁当の包みを持って満面の笑みで手を振る女子がいた。勿論そんな奴はこの高校で1人しか居ない。

「……梨華」

今度はクラス全員が梨華を見ていた。梨華はその視線の多さにきよんとしていたが、直ぐに私に向き直るとまた明るい声で言う。

「早く！ お昼35分しかないんだよー？」

私は無言で弁当の包みを持って、梨華の方へ行つた。

「どーしたの？ あたし見た瞬間に固まったりして」

「別に。何でもないよ」

「そー？ ならいいけど」

さっきの屋上に向かい、直接座って包みを広げる。梨華は膝を崩して座り、私は脚を伸ばした。フェンスの向こうには春の青い空が広がっていた。高台の学校っていいな…と漠然と思う。

「レイ顔色悪いけど、また貧血？ っていうか生理？」

その声に梨華の方を向く。彼女はピンクのハート柄の包みを敷き

ながら私を見ていた。私は青い水玉の包みを畳みつつ答える。

「違う。さつき吐いた」

「えーつまたあ？ レイちっちゃい時から弱いんだから気い付けてよね」

「努力はしてみるよ」

こいつは私の事なら大体知ってるだろう。小学校からの付き合いだともう幼馴染と言えると思う。

「レイー卵焼きちょうだいっ」

「ああ、食べたいのあったら取っていいよ」

「ありがとー！ レイ料理うまいからお弁当もおいしーよね」

「ま、ちっさい頃からやってるからな」

「ねえレイー、今度あたしの分のお弁当つくってきて」

「いいよ」

「えっ！ いいの！？」

「別に。1人分も2人分も変わんないし」

「ありがとー！！ レイ大好きっ」

「おい、くつつくな梨華」

「えへへー」

梨華が女の子っぽいピンクの箸で私の弁当箱をつつく。私は食べる気もしないので、梨華の弁当箱を見た。彼女の母親が作っているらしいその中身は、手作りで少し冷凍食品が混じっている。

「てか梨華さあ、あんたならもう6組で友達出来たでしょ？ そいつらと食わない訳？」

梨華は大きな瞳を少し開いてから、「ふふー」と笑った。何だこいつ。

「協調性皆無のレイの事だからー。どうせクラスの女のコ達敵に回したんだろーなと思ってー」

「はあ？ あんたも同情？」

「そんなんじゃないよー。それに1日目はレイと食べたかったの」「物好きね、あんたって。そんなだから私なんかの親友になっちゃ

うんだった」

「えー？ いいじゃん。あたしレイの事好きだし、だから一緒にいんだよ。ダメなの？」

こいつは真顔でこういう事を言う。

「あー、まあいいや。好きにしなよ」

「うふふ、そうしますー」

梨華だけが、女って生き物の中の例外だった。

帰り道での遭遇

お昼も終わって午後となる。さすがに初っ端から5時間目は無いように、すぐ下校となった。…だったら昼食持参じゃなかったっていいのに。

ざわめきが消えない下駄箱で、独り靴を履き替え外へ出ようとしたら、スカートのポケットの中に押し込めていた携帯電話は控えめに鳴った。梨華からメールだった。

《今日は1日おつかれ》

これから6組の子とかとカラオケ行くんだけど
レイも行かない??》

こいつは私の性格を分かった上でこういう事を言ってるのか。思わず溜め息が零れるが、何せ梨華は天然である。いちいち腹を立てたらキリがないので冷静に対応しておくとしよう。

《遠慮しとく。あんたは楽しんでい》

それだけ送って、携帯電話を鞆の中に仕舞うと新入生の群れの中を進んだ。

女子って、いや男子もか。話しながら歩いてる奴らって、随分歩くのが遅いと思う。

私の場合は普通であるつもりだが、無意識に早足なんだろう。気付けば周りは誰もいない。このままさっさと行って帰るのか。今日は買物がある。

最寄りのバス停で足を止める。

すると、だ。

「…おいつ!!」

物凄い力だった気がする。肩を掴まれた。

「っ!?!」

正直に驚いた。首だけで振り返ると、微かに人影。何っ！怪力だこの野郎…

「…っ、痛い、」

思わず顔を歪める。そいつはぱっと手を離した。

「あ、すまねえ…!」

肩をさすりつつ、振り返る。鞆を持って霜村高校の制服を着た男子生徒が、息を切らしてそこに居た。髪は染めてないと思うけど、茶髪だ。結構伸びてる。ボタンは第二まで開いてるし、ネクタイも緩い。ブレザーもボタン閉めてないし、制服をきちんと着てない所を見ると真面目な奴ではないらしい。中々整った顔立ちだけれど、眼力が鋭い。そもでもって何より、身長がでかい。150ちよつとの私より30cm近く差があるんじゃないだろうか。体格のいい野郎だ。

で、何でその不良怪力男子生徒（仮）が。私に何の用か。

「……何か、用？」

「っ、はあ、くそ…！テメ、歩くのクソ速えんだよ…！やっと追い越したってのに、その、言い方あねえだろうが…」

質問の答えになってない。てかこいつ、ずっと追いかけてたのか。そもでもってこんな息切れしてると。そいつが息を整えるまで、私は無言でそいつを凝視していた。こいつ誰だろ、見覚えはない。

「……お前、瀬村だろ？ 瀬村礼。1年2組の」

「違っつて言ったら？」

「違っつて言ったら？」

「じゃあ確認すんなよな。」

「はいはい、瀬村礼ですけど。で？ 私に何か用？」

男子生徒は自分の鞆の中から、今日の4時間目に配布された数枚

のプリントを出して私の目の前に突き出した。確か入学後に色々書きこまなきゃいけない面倒なやつだ。

「これ、忘れてったぜ。担任が俺に届けるとかほざきやがった」
御苦労なこった。私はそれを受け取ると鞆の中に仕舞う。

「そうか、ありがとう」

そう言った瞬間に、男子生徒の目が大きく見開いた。驚いてる顔だ。

どうしたのか　と聞こうとしたら、バスが来た。バッドタイミング。

「じゃ、私このバスで帰るから。あんたも帰れ」

「……俺もこれで帰るだけだ」

「はあ？」

「だってお前北守中出身だろ？　俺はその隣の杵嶋中なんだよ」

「あんたの出身校なんて知るか」

「うっせえ」

言い争ってもバスの乗客と運転手に迷惑なだけなので、仕方なしに私と男子生徒は2人でバスに乗る。意外にも今日が入学式の高校が多かったようで、車内は新入生でこった返っていた。私も男子生徒も吊革に掴まった。

バスが発車する。

「……ねえ、あんたさ」

私がぼそつと呟く。

「何だよ」

「担任に言われたって事は、あんた私と同じクラス？」

「…それどころか俺、お前の隣の席なんだけど」

「マジ？　覚えてない」

「お前、瀬村だろ。俺は篠原だから、お前の左隣が俺だよ」

「篠原？　フルネームは？」

「篠原遥かめはらのしほ」

「随分と綺麗な名前ねえ」

「あつそ」

篠原遙は随分と口が悪い。私も人の事は言えない口調だけど、こいつよりはまだマシな気がした。

「にしてもお前、初日からすげーな。あの態度」

「何の事だ」

「昼に女に向かって暴言吐いたろ。物凄えしかめっ面で」

「ああ、うん。一応認める」

「無意味に女敵にすんなよ。めんどくせえぞ」

「これから3年間うざいの堪えて愛想笑いするよりマシってもんよ」

「変な奴」

「あんたもね」

高校生活1日目。

女子を敵に回して親友と昼を過ごし、不良と一緒に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271w/>

無重力高校生。

2011年11月14日03時27分発行